[曲 名] Suite Espagnole

スペイン組曲

I. Estudiantina

エステュディアンティナ

II. Habanera

ハバネラ

III. Bolero

ボレロ

[曲 種]

[作曲者] C.Graziani-Walter

カルロ・グラツィアーニ・ワルテル

[編曲者]

作者は1851年8月1日ブリュッセルに生まれ、1927年8月30日イタリアのフィレンツェに逝いたイタリアの作曲家。

一般には映画音楽の軽快な舞曲で成功を収めたが、沢山のピアノ小曲が愛好された。

歌並にピアノ教則本の著もあり、彼のオペラ「シルバーノ」は1879年4月19日フィレンツェのパルラコルダ劇場で上演された。

マンドリン音楽には早くから関係し、同じフィレンツェに其頃住んでいたカルロ・ムニエルにも注目され、

同市の由緒あるマルゲリータ皇后マンドリン合奏団の指揮者となった。

1905年頃フィレンツェで「Al Mondo Musicale」誌を発刊。

之の主幹となり自作の他にMunier, Becucci, Toselli, （セレナータで著名）Alassio 其他の作家の優れた興味ある作品を発表した。

その種目はマンドリンとギター、マンドリンとピアノ、プレクトラム三重奏曲、四重奏曲、歌とピアノ、ヴァイオリン、フルート、ギター合奏等である。

多数のオリジナル作品の外に古来よりの名曲、歌劇の序曲、抜粋曲等の編曲と頗る多くマンドリン楽勃興時代の興隆に多大の貢献をした。
彼の作品で斯楽関係の出版は非常に広範囲に亘り、
リコルディ（ミラノ）カリッシ（ミラノ）フォルリヴェージ（フィレンツェ）コメリーニ（ボローニア）クランツ（ブリュッセル）シュミドル（トリエステ）
ブラッティ（フィレンツェ）ブーシェ（パリ）マンドリニズモ（スイス）等各国各所から出版された。
彼の斯楽の代表作としてはダンテとベアトリーチェが挙げられようが、彼の故国ベルギイからはマンドリンの教則本も刊行されている。
然し独奏曲は少なく、その殆どが種々な楽器の組合せによる合奏曲である。
旋律は華麗優美軽快で抒情に満ち本邦に斯楽が移入された初期は彼の多くの曲が好んで上演された。
本組曲は、1. エステュディアンティナ 2. ハバネラ 3. ボレロの三楽章から成り作品181番。
当時パリーに在って活躍した著名なマンドリン教授ピエトラペルトーザに贈られた。
彼の曲は殆どが第一・第二マンドリン、マンドラ、ギターの四部に書かれ、マンドロンチェロは組み入れられていない。
本曲もその例に洩れないが、低音の充足は初期にあってはピアノを用いている。
エステュディアンティナは本邦ではワルドトイフェルの同名のワルツが女学生と訳されて通っているが実は「諸種の楽器を持ちよった学生の器楽団体」のことで、今日では一般に小編成のマンドリン合奏団を指している。
今世絶初期パリーでマチョッキが発刊して永年続いた斯楽誌L Estudiantinaも此処に由来したものと思われる。
第一楽章エステュディアンティナはト短調のワルツ調で始まり、ニ長調と華やかになる。
第二楽章ハバネラはホ短調ーホ長調、第三楽章ボレロはイ長調ーニ長調ーイ長調と帰る。夫々スペイン舞曲のリズムによってはいるが、
スペインの生々しい激しさよりもイタリアの旋律美の方が勝ってイタリアから見たスペインの感じは免れない。
このこのは東洋風何々、日本風何々と題したものがいづれもそうした内容であり、
今日のように交流が繁くなり様子がよく解ると本曲もスペイン舞曲のリズムを借りたイタリアの曲と見なさなければなるまい。
表紙絵はギターの伴奏に伴ってカスタネットを持った男女が踊っている場面が描かれ、フィレンツェの

ヴェンテュリーニ出版。

此処では当時の斯楽作曲家、カルロ・アクトン、カルロ・カリニヤーニ、フェルディナンド・フランチア、カルロ・スチュラーニ等のものが数多出版された。

彼も本曲の外、我が恋い、ダンテとベアトリーチェ、美しき生活、婚礼へのセレナータ、オルレアン、パリーの生活、亡命者、ロンバルド風セレナータ、海に来たれ等枚挙に遑ない。

1969年10月31日発行

イタリアのマンドリンアンサンブル佳曲百曲集第一集より